

O C A R e p o r t 2 0 2 2

# OCAレポート2022

Off Campus Activities under MRA Foundation



楽しい・友達作り・国際交流

# 私たちがやりたいこと

## 行動目標

### 1) コロナ後の国際交流

コロナで3年間海外へ行くことも海外の方が日本へ来ることでもできませんでした。2022年やっと新規感染者が減少して日本への入国規制も緩和されてきました。8月にタイの学生と教授あわせて17人を招待して山梨県の小淵沢で日本の学生を入れて参加者50人でサマーキャンプを行いました。この時東京都の新規感染者数はまだ一日40,000人と多く、参加者全員PCR検査を行い、イベントの関係者も全員抗原検査を行う等細心の注意を払っての実施となりました。

しかし3年ぶりに対面で話し、食事をして、交流活動を行うプログラムは学生達にとっては大変刺激的で面白い体験でした。(下の写真が小淵沢での集合写真です。) タイと日本の友達同士で夜遅くまで語り合いました。

タイの学生は帰国後今回のサマーキャンプが日本で友達を作るのに素晴らしいプログラムであることを大学関係者に報告したので、チュラロンコン大学、メーファールアン大学から今後このプログラムを毎年企画してもらいたいとの要請が来ています。

サマーキャンプに続き10月に中央、埼玉、チュラの北部タイツアー、12月にメーコックを訪問するCocoWAプロジェクト、3月に慶応、チュラ、MFUのボランティアワークキャンプを行いました。日本からタイを訪問した学生たちはサマーキャンプで友達になったチュラやMFUの学生の歓迎を受け、再会を喜び合いました。

オンラインの交流でも多くの友達を作れると思っていましたが、やっぱり現地に行って一緒に交流活動を行うほうがずっと刺激的で面白いと改めて知った1年でした。

### 2) 私たちがやりたいこと

2023年は4月に韓国ツアー、8月にサマーキャンプ、10月に北部タイツアー、12月にCocoWAプロジェクト、3月にメーコックの子供達の日本訪問を予定しています。

私たちはこれらの国際交流プログラムを通じて以下のような考え方、生き方を皆で共有していきたいと考えています。

- ① 海外の友達を持ち、海外を身近に考えること。
- ② 世界の動きに注目し、広い世界観を持つこと。自分の意見をはっきり持つこと。
- ③ 自分が何をしたいのか、何をすべきかこころの声を静かに聞いて、その声に正直に従うこと。
- ④ 人はそれぞれ異なる。多様な価値観を受け入れ、人をありのままに理解し愛すること。
- ⑤ 人が今どのような気持ちでいるか思いやり、考えること。
- ⑥ 誰が正しいかではなく、何が正しいかを考えること。
- ⑦ 社会のためにどのように生きるかを常に模索すること。

このような考え方で人と接し、日々の生活を楽しみ、人生を送ることができればよいと考えています。



8月

# 8月サマーキャンプ

2022年8月1日～8月4日



## 概要説明

日タイ学生交流「サマーキャンプ」を8月1日～4日まで小淵沢の「女神の森」でおこないました。世界的なパンデミックで、予定していたOCAの活動の多くが中止に追い込まれました。これまで続けて来たタイ学生訪日研修プログラムも3年にわたり中止となり、お互い顔を合わせてのリアルな交流ができなくなったままで、残念な思いでいました。そんな中、日本への海外からの入国も緩和されタイから日本への入国の道筋が見えてきました。

タイから17人の学生と教授を迎え、タイの学生を日本に呼び日本の学生との交流を山梨県小淵沢にある「女神の森」の施設で実施しました。タイからはチュラロンコン大学から学生14名と教授1名、MFU(メーファールアン大学)から2名、日本からは中央大学17名、埼玉大学2名、慶應義塾大学からは10名の学生が参加、スタッフ4名を加え計50名での交流会となりました。

## 活動内容

8月1日 タイからの参加者は成田空港からバスで直接小淵沢へ。15時、日本の学生らと合流、オリエンテーションからサマーキャンプが始まりました。自己紹介やグループ分けが行われ4日間の交流会がスタートしました。

8月2日 農業に頼らない食の安全性と環境に配慮した農業を実施している「女神の森」オーガニックファームでの農業体験を行いました。昼食と夕食は農園で収穫した野菜や買い出しに

行った食品でグループごとの料理対決。

8月3日 タイ学生によるトークセッションを行いました。これは今年4月からのタイ勉強会の延長で「聞きたいけどなかなか聞きにくい問題」をタイの学生に聞いてみようという勉強会です。





### テーマ1 「なぜタイではマリファナが合法になったの？」

タイでは最近大麻の栽培が許されることになったことについて、日本の学生から多くの質問が出ました。タイの学生がコンビニで売っているマリファナ入りのドリンクや、日本料理屋のマリファナ入りメニューの写真を紹介。大麻の栽培は薬用で、マリファナたばこの販売は違法だとの説明があり、日本の学生は驚いていました。



### テーマ2 「日本の天皇制とタイの王室について知りたい」

日本の天皇は国の象徴として存在している。タイの王室に関してみなさんはどのように感じているのか。日本の学生から質問がありました。学生たちで色々な意見交換がありました。

### テーマ3 「日本の若い人はLGBTについてどのように考えているの？」

タイの学生からLGBTについて色々な質問が出ました。日本の学生からも自分の友達を紹介し、自分の意見を述べて話が盛り上がりました。

トークセッション後、庭に出てグループごとに考えたゲームをおこない、子供時代に戻ったかの様に走り回り大いに盛り上がりました。夜にはバーベキューパーティと花火大会で交流。大盛り上がり！

約3年近く実施出来なかったリアルに顔を合わせたの交流プログラムが実施出来たことは本当に感慨深いものがありました。世界的なパンデミックの中、確かに技術的な交流方法は発展しそれなりの効果を楽しんできましたが、やっぱり実際に顔を合わせ、話が出来ることの素晴らしさを改めて実感できた4日間でした。お互いの国の文化や生活、物の考え方、参加した人たちのそれぞれを知り、その違いの気づきを知って理解しようとみんなが努力していた姿は、なにものにも変え難いものでした。タイ人と日本人との間の違いだけでなく、ここに集まった全ての人たちが自分との違いを知って、その違いを考えてみる、そして互いを尊重し、一つのことを協力して完成させていくことの素晴らしさ。それを共有できたサマーキャンプであったと感じています。

### 参加者のコメント

全体を通して、沢山のイベント盛りだくさんでしたが、そのどれもがタイの学生とも日本の学生とも仲を深めるのに非常に良いアクティビティで楽しく遊ぶ事が出来ました。また、ファミリーを組んで行動する中で私自身が思っていた以上にお互いに仲を深める事が出来て驚き、国籍や言語の違いに関係なく皆で楽しむ事の出来た事にとても満足しサマーキャンプに参加して良かったと思いました。(Raimu)

人生で最高のキャンプでした。皆と一緒に楽しいキャンプの時間を過ごせました。議論をしたり、喜びや悲しみを一緒に分かち合えました。このキャンプを通じて学生の皆さんと、かけがえのない関係を築けました。(Tah)

今回のキャンプは自分を成長させ、また子供心を取り戻すことで好奇心を持つことができました。これからの生活でどのようなことを意識して生きていけばいいかということを示す道標となったと思う。(過大評価してるわけじゃないです!!!) (Izumi)

タイの王室に関して、日本に来てくれているからこそ聞ける意見を聞いたのは、大変価値のある経験だったと思います。トーク会の後にも何人かに意見を聞いたのですが、ピティ先生の意見とはだいぶ違って、世代によっても考え方が異なるのだなと思い聞いてとても面白かったです。一人一人が国のあり方に対して強い意見を持っているというのは素晴らしい事だな、と思いました。(Kento)



## サマーキャンプの風景



## 北部タイツアー

2022年10月23日~10月30日



## 概要説明

コロナ禍の中、中断されていた「北部タイツアー」が3年ぶりに10月23日~30日の予定で実施された。日本からは中央大学小森谷ゼミ生13名と小森谷教授、埼玉大学から2名が参加。コロナ感染対策を考え、3名のスタッフ、チュラロンコン大学からは6名の学生とスタッフ2名が参加、総勢27名のツアーとなった。またチェンライではMFU(メーファールアン大学)の学生10名とRapipong先生が参加し児童養護施設のメーコックと一緒に過ごした。

コロナも落ち着きをみせたとはいえ今回のツアーは最大限の注意と対策を考え、参加学生たちの高い意識や努力により実施された。お陰様でツアー中、感染者も発熱者も全く出ずに無事終了することが出来た。

また、今回のツアーでは今年8月に山梨県小淵沢「女神の森」で実施した「サマーキャンプ」に参加してくれたチュラやMFUの仲間たちが出迎えてくれて、最後まで行動を共にしてくれた。サマーキャンプで繋がった友情が再び花開いたツアーとなった。

## 活動内容

これまでツアー参加学生たちはWebを通じタイの勉強会を重ね、タイの経済格差の問題やタイ北部の少数民族の実態などを勉強してきた。その時の講師としてお世話になった国際労働財団バンコク所長の関口輝比古氏の案内で、バンコク到着の翌日、バンコク市内にあるスラムの一つである「オンヌット」のコミュニティを訪れた。

チュラロンコン大学の学生たちもこれに参加、チュラのある学生はバンコクにスラムがあることは知っていたが、「こんな環境で厳しい生活を強いられているのを知って、この国の新しい視点を見ることが出来て良かった」と感想を述べていた。

コミュニティ視察後場所を移して関口氏よりタイの所得格差やスラムの課題、現状についての話をお聞きした。タイにおける都市と地方との経済格差が激しい現実、タイの経済発展の為、バンコク周辺では常に労働不足が続く地方からの出稼ぎ労働や周辺のミャンマー、ラオス、カンボジアからの外国労働者がスラムに集まり3kと呼ばれる厳しい仕事に従事している。そこにいる子供たちも十分な教育を受けられていない。厳しい状況下でも自国に帰るよりもスラムでの生活を続けているとのこと。バンコクの全人口の5分の1にあたる200万人ほどが、2,000近くのスラムで生活している現状を知らされた。



10月25日 チュラロンコン大学を訪問。経済学部のリーマー先生をはじめ学生たちが迎え入れてくれて中央大学とのセミナーを実施した。

中央大学小森谷ゼミとして3つのグループから日本での研究内容のプレゼンテーションが行われた。

セミナー終了後はチュラロンコンの学生たちの案内でキャンパスツアーを行う。チュラの大学設立を説明する歴史博物館や最新のデザインで作られた図書館などを見学。特にその洗練された図書館に日本の学生たちは大変な興味を抱いていた。キャンパスツアー後はチュラロンコン大学が用意してくれたウェルカムパーティーの夕食会。楽しいひと時を過ごしお互いの交流を深めていった。

10月26日 チュラロンコン大学から8名が参加し、朝の早い便で一行はバンコクからチェンライに向かった。チェンライではMFU(メーファールアン大学)を訪問。MFUの学生による大学の説明やチェンライの歴史に関するプレゼンテーションが行われた。

夕食の前には関口さんが講師となり、タイ北部の山岳民族や都市と地方の格差、子供たちへの教育の問題や差別、貧困さについて話をさせていただき、学生たちとの議論が進んだ。

民族衣装に身を包んだ子供たちがダンスを披露してくれた。その後みんなでコック川の川辺におりコムロイ(ランタン)を星が煌めく夜空にあげたり、花火などで子供たちとの交流が続いた。

10月27日 メーコックの対岸で象に乗り、少数山岳民族の村を訪問した。昼食後MFUの仲間と別れ、一行はチェンマイに向かった。3年前に比べ道路の状況も整備され約6時間のバス

の旅となった。チェンマイのバーンロムサイが経営するhoshihanaで落ち着いた一行は、翌日朝早く起きて朝市(ハンドーンマーケット)を視察。朝食をここで摂ると同時にこの地域に生活する人々の様子を視察した。

宿に戻りバーンロムサイを視察。ここはHIV感染で苦しんだ親の子供たちや地域の貧困生活を強いられている子供たちが暮らす児童養護施設。日本の学生はこれまでWebを通じての勉強会で繋がってきたバーンロムサイの設立者である名取美和さんのお嬢さん名取美穂さんから説明を受けていた。美穂さんは我々の訪問に合わせ日本から駆けつけてくれた。Web上でしか話が出来なかった学生たちと実際に会って話が出来たことを大変喜んでくれて歓待してくれた。

その後我々の訪問を楽しみに待っていてくれた施設の子供たちとサッカーやバドミントンで交流を行った。子供たちのサッカーの上手さには学生たちも舌を巻いていた。昼食後、チュラの学生の案内でチェンマイの街へ。チェンマイの大本山である標高1080mにある「ドイ・ステープ」寺院を訪れた。1383年、当時のクーン王によって建立された大寺院で今も人々の熱い信仰を集めている。ここからはチェンマイの街が一望できる。

10月29日 午後バンコクへ戻る。この日は自由行動となりチュラロンコンの仲間とバンコク市内を観光。

10月30日 午後遅めからの昼食を兼ねてのさよなら会(振り返りの会)となる。これまでのツアーの思い出や一緒に行動を共にして来たチュラの仲間への感謝の気持ちを込めてそれぞれが語り合い交流を行い話はずきなかった。友情を再確認した「さよなら会」の後、その日の深夜便でツアー一行は日本への帰路に着いた。



# 2022年「北部タイププロジェクト」参加者

## Chuo University



内山峻登  
Shunto Uchiyama



山本美玖  
Miku Yamamoto



山口輝  
Hikaru Yamaguchi



石田実由  
Miyu Ishida



中嶋勇介  
Yusuke Nakajima



酒井瑞貴  
Mizuki Sakai



松下彪馬  
Hyoma Matsushita



島田彩良  
Sara Shimada



男澤聖奈  
Seina Otokozaawa



宮本康平  
Kohei Miyamoto



鈴木美陽  
Miharu Suzuki



東田凌  
Ryo Higashida



菱川凌太郎  
Ryotaro Hishikawa



(Professor)  
小森谷徳純  
Yoshimasa Komoriya

## Saitama University

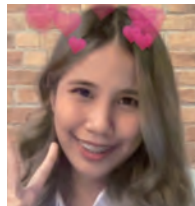


西口哲太  
Tetta Nishiguchi



中山慎哉  
Shinya Nakayama

## Chulalongkorn University



Aimee Potjanapitak



Punnawith Sripaeng Supanath Chameekornkul



Yanin Prasoptham



Chatpimuk Luangaram



Sirawich Wijaithammarit



(STAFF)  
Shongrak Thongsom



(STAFF)  
Auwat Chalemecheep

## Staff Members



高橋信幸  
Nobuyuki Takahashi



奥村康治  
Koji Okumura



島林由香  
Yuka Shimabayashi



小林春奈  
Haruna Kobayashi



1月~8月

# オンライン日タイ学生交流・勉強会



## 概要説明

コロナによる世界的なパンデミックの中、6月17日、7月5日、8月10日と3回に渡りチュラロンコン大学、MFU、中央大学、埼玉大学の4大学でZoomを使用して、話し合い、友達になっていくオンラインでの学生間交流プログラムを実施した。コロナの終息が見えない中、日本とタイでの交流を持つ機会をと、各学生たちに呼びかけ185名強の参加申し込みがあった。

3回のプログラムの内容は以下の通り。

	担当	内容
6月17日	Preaw, Din, 鴨下、大南	Opening talk,日タイの大学紹介、スクールライフ、アルバイトの紹介 タイの徴兵制度
7月5日	Pennie, Tan, 宮崎、増田	好きなスポーツ、行きたい旅行先、今流行っている音楽、グループトーク
8月10日	Cookie, Nice, 福井	学生たちが考えたゲーム、好きな食べ物、折り紙の紹介、オリンピックの話題、グループトーク

## 各先生のコメント

### チュラロンコン大学シリマー先生のコメント

コロナの流行の中このプログラムは学生交流の新しい方法を提案したと思います。参加者の国が遠く離れたり、時間が違うことは交流プログラムにとって何も問題にならない事を証明しました。私は日タイオンライン学生交流プログラムの1回目と2回目に参加しました。プログラムは大変良く構成されていて参加した学生は活発に発言していました。特に日本とタイの学生代表がプログラムの企画と実施に協力しているのに驚きました。普通は日本の学生もタイの学生も恥ずかしがり屋で、あまり話し合いに参加しない傾向があります。このプログラムではとてもリラックスした雰囲気の中で学生たちはよく話し合い、議論に参加していました。このプログラムはお互いを知り、会話を通じて良き友達になる大変よい機会となったと思います。ブレイクアウトルームでも日タイの学生達が少人数に分かれてよく話していました。この企画を担当した日タイの学生代表たちに感謝したいと思います。学生代表たちは何回かの打合せを通じて自由に話し合い、お互いを理解する雰囲気を作り上げていったのだと思います。学生代表、OCAの皆さん、参加した学生達は実際に会えない環境の中で学生交流活動の新しいアプローチを作り出したと思います。

### 中央大学小森谷先生のコメント

今回の4大学オンライン交流会には学術的な要素を入れず、学生が各回における企画を考えたと特徴がありました。新型コロナウイルス感染症のため、引き続きほぼ全ての国際交流はオンライン化を余儀なくされています。そんな中でも新しい試みを実施できていることは大変素晴らしく、その試みに参加できることは私にとっても嬉しい限りです。私も全3回に参加しましたが、英語力にばらつきがあっても、参加学生それぞれが楽しみながら何かを得てくれたと思える交流会でした。



## 4大学オンラインセミナー

2022年1月27日(木)、中央大学の後藤孝夫先生を講師に迎え、チュラロンコン大学・メーファールアン大学(MFU)・中央大学・埼玉大学の4大学共同でのセミナーを行った。タイトルは「タ



イ・日本における移動手段の現状と課題―道路事業と鉄道を対象として―。両国の道路・鉄道事業の民営化の方法、道路混雑の解消策、空路に代わる高速鉄道の建設など、経済学の観点から討論をおこなった。

### <学生からのアンケート回答の抜粋>

- ・ 海外の人と関わる機会を設けることは自分では難しいので、このような企画に参加でき楽しかったです。
- ・ 交通状況について、まったく注目していなかった日本ないし他海外の状況や対策が知れて考えられるきっかけとなって興味深かった。
- ・ 議論内容に関する話し合いというよりそれぞれの現状、生活についての情報交換のような感覚だった。とても興味深かった。



## タイの勉強会

日本の大学生の北部タイへの訪問に先立ち、全3回の勉強会をオンラインで実施した。

### ▼第1回 3月9日 関口輝比古さんのセミナー

#### 「バンコクのスラムの現状」

タイ国内での所得格差と、バンコクに存在するスラムの成り立ち、およびそこで生活する人々の暮らしぶりについて学んだ。

### <学生の感想>

タイの経済格差やスラム、移民労働者の問題などはタイの社会システムの中で構築されており、簡単には解決できない問題だということを身に染みて感じました。周辺の国から移住してきた労働者たちがひどい扱いを受け、搾取されているにも関わらず「自国に戻るよりもタイのスラムで生きている方がいい」と考えるほど、タイの周辺国(ミャンマー、ラオス、カンボジアなど)のくらしが更に苦しいものであるということも本日のセミナーから分かり、タイの周辺国の実態についても興味を持ちました。

### ▼第2回 5月19日 関口輝比古さんのセミナー

#### 「メーコックと山岳民族の現状」

タイ北部にある、子供の教育生活支援を行っている施設メーコックファームの取り組みと、周辺の山岳民族が抱える問題について学んだ。

### <学生の感想>

自分達が調べられる情報からは得られない話を聞けて、とて

も興味深く面白い内容でした。どのテーマも非常に興味がありましたが、一つ挙げるとしたらアネーさんのお話は、タイの社会の問題や実態について知ることができたので、とても興味を抱きました。少し遠慮して質問できなかったのが、悔やまれます。また、最後の方に出てきたメーコックの夕飯が非常に気になりました!タイの学生と交流する時間が、この勉強会によってより有意義なものになると思うため、今後もこの勉強会に積極的に参加したいです。

### ▼第3回 9月14日 名取美穂さん・遠田健太郎さんのセミナー 「バーンロムサイと社会貢献」

名取さんが立ち上げたチェンマイにある孤児の生活施設「バーンロムサイ」設立のいきさつと、同施設がおこなっている社会貢献活動について学んだ。

### <学生の感想>

バーンロムサイの施設がどのような感じなのかよくわからなかったのですが、中継を通して、とてもきれいで落ち着ける場所だと思いました。実際に行くのがさらに楽しみになり、色々な場所に行ってみたり、子どもたちとも遊んでみたいと思いました。お話の中で、色々大変な思いをしたエピソードもあり、バーンロムサイがどれだけ大事な存在か、今後も子どもたちにとって必要な施設だと感じました。HIVについても中々周知されておらず、偏見もまだあるという話を聞き、今後HIVについての知識を多くの人に広げるためにも、私たちがHIVについて知り、周りの人にも教えていくことが重要だと思いました。

2023年3月

# 慶応・チュラ・MFUのワークキャンプ

2023年3月24日～3月29日

防水壁の完成!! 慶応、チュラ、MFUの名前が書かれています。



## 概要説明

2022年10月末に行われた中央・埼玉・チュラロンコン大学の北部タイツアーに続いて、2023年3月に、サマーキャンプで友達になった慶応大学・チュラロンコン大学・メーファールアン大学 (MFU) の学生達がチェンライのメーコックを訪問してワークキャンプを行いました。メーコックは昨年8月にコック川の洪水の為に農場、養魚場、ゲストハウスに大きな被害が出ました。今回、慶応・チュラ・MFUの3大学の学生とOCAのスタッフ合計32人がメーコックを訪問し洪水で流された防水壁のコンクリート工を手伝うボランティアワークキャンプを行いました。

## 活動内容

3月24日に慶応の学生9人がバンコックに入り、25日にチュラロンコン大学を訪問。チュラの学生10人と再会し、キャンパスツアー、バンコック市内の散策と夕食会を行いました。

その後チュラの学生6人が慶応の学生とともにチェンライに飛び、メーコックに入りました。この時期、チェンライは周辺の農家とミャンマーの農民達が行う野焼きの為に大気汚染がひどく、マスクを常時付けなければいけないような環境でした。野焼きの大気汚染の為に空が白濁しており、期待していた綺麗な夜空にたくさんの星、いつも見られる流れ星を観賞する機会はありませんでした。



チュラロンコン大学の学生と再会



アマラックさんから水害についての説明を聞く学生達



土砂積めと搬送作業

3月27日、学生達はチェンライのメーファールアン大学を訪問、サマーキャンプに来たMFUの学生ほか20人の学生に迎えられました。MFUのミャンマー人留学生を中心としたMFU観光大使がキャンパスツアーを行い、その後MFUの学生達が案内してホワイトtemplルほかチェンライの市内視察を夜まで楽しみました。

3月28日はいよいよボランティアワークです。学生たちは作業服に着替え、軍手をはめてメーコックの子供達と一緒に作業を行いました。袋に土砂を詰めて基礎工事の現場に運ぶ作業、コンクリートと土砂を練った材料をバケツリレーして現場に運ぶ作業を分担して行いました。タイの3月は北部タイでも気温は35度から37度。タイの気候に慣れない学生達にとっては、相当厳しい作業となりました。メーコックの子供達の方が作業に慣れており、東京やバンコックから来た学生達より体力があるので、気にもせず作業を続けていました。作業を終えて皆くたくたになったところで、メーコックの責任者のアヌラックさんが手作りのアイスcreamを提供してくれて皆一息つきました。この日の夕方周辺の農家が野焼きを行った火が山林に燃え移り、メーコックの裏の山が火事になる騒ぎが起きました。この時期タイは乾燥期なので枯草に火がつき、めらめら、パンパンと言う大きな音がして火が近づいてきます。風の向きによってはメーコックに引火する可能性も出てきたので、MFUのラピポン先生と相談したところMFU本部から学生をこの地域から退避させてもらいたいとの指示が来たため、MFUが準備したバスでMFUの学生寮に行くことにしました。その後すぐ消防車が来て鎮火しましたが、急遽身支度を整えてバスでMFUに向かう事になりあわただしい1日でした。

3月29日朝、メーコックで子供達と会いほっとしました。この日はメーコックの近くの象キャンプで象乗りを楽しみ、アヌラックさんの昼食を楽しんだ後、全員で振り返りとさよなら会を行いました。メーコックの子供達とも抱き合って別れを惜しみ、空港に向かう事となりました。バンコックではサマーキャンプに参加した学生のうち、今回のツアーに参加できなかったチュラの学生達が会いに来てくれ、懐かしい友人たちと再会しました。慶応の学生達は成田までの帰国便が急にキャンセルになった為、その日の朝まで空港で待機し、翌日早朝にソウル経由で成田に向かいました。短い訪問でしたが、いろいろなことが起こり、それらの問題をタイの学生と一緒に克服した旅でした。



セメントのバケツリレー

このワークキャンプの参加者のコメントを最後に紹介します。「このツアーに参加した全員が最高の旅だったと言っており、僕自身も一生の思い出をたくさん作ることができました。道中もハプニングだらけでしたが、それも全て面白く、とっても楽しかったです。

また、チュラとMFUの学生やメーコックの子供達も皆本当に心優しく、とても親しくなることができました。このような素敵な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。OCAの皆様に出会うことができ心から良かったです。  
慶応大学新3年 水野賢人



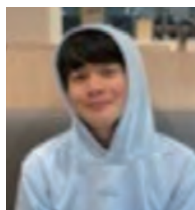
メーコックに迫った山火事



メーコックの子供達と

# 慶應・チュラ・MFUのワークキャンプ参加者

## Keio University



水野賢人  
Kento Mizuno



高木葵  
Aoi Takagi



佐藤歩  
Ayumu Sato



山澤実季  
Miki Yamasawa



高瀬京子  
Miyako Takase



徳田百々香  
Momoka Tokuda



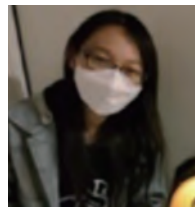
福澤愛  
Mana Fukuzawa



安西志帆  
Shiho Anzai



前島圭汰  
Keita Maejima



Pang Ka Yee

## Chulalongkorn University



Khing



Ploy



Belle



Chair



Web



Cooky



Sirima.B 先生

## Mae Fah Luang University



Zee



Lukyee



Max



Gingphai



Mud



Preaw



Fei hung



Da



Pond

## Staff Members



Dio



Rapipong Promnart 先生



Anuluck Chaisurin  
(メーコック財団)



高橋信幸 (OCA)  
Nobuyuki Takahashi



高橋明美 (OCA)  
Akemi Takahashi



肥沼哲也 (OCA)  
Tetsuya Koinuma



島林由香 (OCA)  
Yuka Shimabayashi



小林春奈 (OCA)  
Haruna Kobayashi



瀧澤明子 (OCA)  
Akiko Takizawa



戸邊治朗 先生  
Jiro Tobe

# Asian Beat Project



## 概要説明

コロナ禍にともない、オンラインに活動の場を移した、Asian Beat Project。この5月に開催も4度目となり、アジア各国を巻き込んだ友情の輪が広がりました。スタッフも含め総勢34名が参加。日本・韓国・インドネシア・タイ・台湾・ネパール・ベトナム・フィリピン・マレーシアというバラエティ豊かな国々から集まった仲間たちが、歌やダンス、トークタイムなどを通じてお互いを知り合い、いつか会える日を目指して一日一日を大切に過ごしました。



## ABO4活動報告

### タイ出身の参加者(スタッフ)からの感想

こんにちは、タイ出身のMindiです。  
私は昨年このアジアンビートオンラインプログラムにキャストとし

て参加しましたが、今年は、ゆかちゃん(島林由香、プログラムスタッフ)に誘われ、スタッフとして参加することを決めました。月日の流れは早いもので、10人のスタッフ(日本、インドネシア、韓国)と毎週火曜日にスタッフミーティングをし始めて、2か月が経ちました。今回は、このプログラムに対する私の考えを綴り、皆さんにABO(Asian Beat Online)プログラムの魅力についてお伝えできればと思います。

2か月前に始まったスタッフミーティングの中で、まず、お互いのパーソナリティを共有しました。1人1人に特別な輝きがあることを知り、お互いに考えることを伝え合うことができ、とても良い時間となりました。自分では弱点だと感じる部分でも、他の人から見たらプラスにも捉えられるということがわかりました。

4月には、参加者(キャスト)を集めるためにキャスト説明会を3回行いました。私たちは、説明会参加者の皆さんが自己表現をし、ABOの雰囲気を感じられるようなアクティビティを計画しました。私も初めて、一つのアクティビティ(それもメインの!)を任されることに!とても緊張しましたが、上手くいったと思います。スタッフ1人1人の活躍により、ABO4の魅力が活き活きと伝わり、意味のあるものなんだと参加者たちに届いてることがはっきり感じられました。参加者からもいい時間だったという声も上がり、最高でした。キャスト説明会が終わり、スタッフミーティングはプログラムの内容づくりがメインになっていきました。

3週間、土日全6回のプログラムの中で、私たちは、自分のことを表現したり、新しい文化を学んだり、様々なアクティビティを行います。今回キャストは、「ファミリー（全員を小さなグループに分けたチーム）」に分かれ、最終週に1時間のイベントをするというミッションが与えられます。過去のABOプログラムと違い、ファミリーで協力して、オンラインの「イベント」を作り上げます。これがとても楽しみ！

もしあなたが、ABOの特別なところってどんなところ？と聞くとしたら、そうですね、私たちは共通する考えを持っていると感じます。それは恐らく、「どんなことも受け入れる思いやりの気持ち」です。ミーティングでは、思ったこと感じたことを心をオープンにして伝えますが、それをみんな注意深く聞き合います。また、私たちは進んで仕事をしますし、お互い助け合います。たとえ育った環境が違っても、「家族」のような存在です。

3つの単語でABOについて述べるなら、

陽気  
進み続ける  
友情

ABO4はオンラインプログラムではありますが、少しでもリアルを感じるため、今回、スタッフ間で手紙の贈り合いをしよう！ということになりました。届くのが楽しみです。そして、極めつけは、、、今年6月にJapan Assemblyという京都でのABO同窓会を計画しています。実際に会うことができるかもしれません！残念ながら私は今回参加できないのですが、次は必ず行けると信じています。

最後に、初めは、コミュニケーション能力を磨くことが、このプログラムに参加した私の目的でした。しかし、今は、一生涯の友達を作ることが私の目標になっています！

自分の時間を使ってでもこのプログラムに参加する価値があると思っています。ABOの仲間になれたことが、このパンデミックでの一番の収穫です。あなたもいつかはそう感じる時が来るといいなと、願っています。

## Asian Beat Online in 京都

6月18、19日にアジアビートオンラインに参加したことのある仲間たちと、リアルで会う「Japan Assembly」というプログラムを実施し、参加者が京都に集まり楽しい時間を過ごしました！予定では、海外からも参加者を集めようとしていたのですが、新型コロナウイルスの状況によりやはり入国が難しく、今回は日本在住の参加者のみで、小さい規模で行いました。日本在住者のみといっても、日本人はもちろん、フィリピン出身、インド



ネシア出身、アメリカ出身と多様なメンバーで同じ時間を過ごすことができました。大きなトラブルもなく、「やっぱり会って話せるって良いよね！オンラインのおかげで出来た繋がりがようやく実りを迎えたね！」と、実際に会って活動することの素晴らしさを体感した時間でした。これからはオフラインの活動も増えていってほしい。今後への期待と共に、参加者の1人が書いたブログをお楽しみください。

みなさんこんにちは！日本出身の八木 宏幸（やぎちゃん）です。普段は東京都に住んでいますが、新幹線に乗って京都まで Japan Assemblyに参加してきました！！いつもは、オンラインでしか会ったことがないみんなだけど実際に会うとどんな感じなのか。ドキドキしながら京都駅の集合場所へ向かいます。「迷わないで出会えるだろうか？」なんて不安を久しぶりに感じながら集合場所へ向かいます。しかし、そんな心配は不要でした。ワイワイ楽しそうな集団が目前にいたからです。挨拶を済ませ、ワクチンの接種証明や陰性チェックを行い京都の街へいざ出発です。まず向かったのは東本願寺。

大きなお寺で、門をくぐって目の前にあるお堂の一部が開放されており、そこでゆっくりしたり、お寺の中を見学したりお参りしたりしてみんな思い思いに過ごしました。次は宿泊先にチェックイン！荷物を置いたらみんなで夜ご飯の買い出しです。人によってはいろいろな事情で食べられない食品は少なからずあります。（インドネシア出身の参加者は、信仰上の理由で、豚肉を摂取できないということでした）みんなが安心して食べられるように話し合いながら食材を買うのも、異文化を感じる事ができ、とても興味深かったです。宿泊先に戻るとみんなで協力し合って、自分の家庭料理や母国の味を再現しようと夜ご飯を作り、楽しく食べました！今後行われる予定のリアルツアーの詳細が発表されたりと大盛り上がりです。オンラインと違って、話したい人のところへ行ったり話したり、ある人は世界の絵本について実物を片手に語りだしたりと、ワイワイガヤガヤしながらみんなで楽しい夜を満喫しました。

次の日は、朝早く起きた人は瞑想したり、散歩へ行ったりした後にみんなで朝食を食べ、場所を変えてアジアビートの今後についてみんなで話し合いました。

いろいろなアイデアが出てとても有意義な時間になりました。



# タイ メーコック財団支援



## メーコック財団への支援

メーコック財団は、現在の代表アヌラック・チャイスリンさんの夫である故ピパット・チャイスリン氏が当時聖学院中学校高等学校教諭であった戸邊治朗先生と麗澤大学の竹原茂教授と一緒にタイや海外の学生や社会人にチェンライの農村や山岳民族を訪問し、暮らしを体験する「スタディーツアー」を開催することから始まった。当時のタイ北部の現状を学ぶなかで、麻薬、貧困、売春、教育などの問題が出てきた。中でも麻薬栽培が昔から行なわれていたことから麻薬中毒は深刻な問題で、多くの二次的な問題を引き起こしていた。

その後、ピパット氏は麻薬中毒のリハビリ施設を作り、村の麻薬中毒の根絶をめざし活動を始め、活動は実を結び、タイ政府に引き継がれた。麻薬のない社会を作るには、子供達への教育が大事であるという考えに至った。当時、村の多くの子供の保護者は、薬物中毒で亡くなったり、収監されたりして、親のいない子供が多くみられた。その子供達は親類の家などに預けられていたが十分な食べ物や衣類、教育が受けられない子供も多くみられた。そうした状況の子供達を預かり生活をともにして学校に通わせ、少しずつ施設を増やして行き、メーコック財団という現在の形態になった。2021年にはOCAのメンバーやOCAタイランドの仲間達、名古屋を中心に活動しているMake a Differenceの皆さん、アジアビートのキャストを中心としたチャリティ企画などで、個人からの寄付をつのり支援の輪が広がり、子供達の待望の「コンピュータールーム」の建設を実現出来た。2022年に起きた洪水によりメーコックは被害を受けたが、同年12月のCocoWAプロジェクトでは現地に入った参加者が川岸の補修を支援した。

## チャリティRun

3月26日(土)に開幕式を行い、スタートを切りました。参加者

25名の参加費がそのまま寄付金としてメーコックに送られました。集まった金額は、60,500円。「全員で累計距離1,000kmを走る」という目標を掲げ、参加者が互いに励まし合いながら日々歩き、走りました。私達は普段、日々の生活に追われ、なかなか自分の体の健康を気遣うことも忘れてしまいがちです。このような機会を利用することで運動に取り組むことができました。

## チャリティ Cooking

「楽しく国際貢献！」シリーズのお料理コーナー、グローバルチャリティクッキングThai Vol.2を9月3日に開催しました。12名の方から、合わせて55,000円の支援金をいただきました。今回作ったのは「Pad See Ew(パッシーユ)」と呼ばれる一品。運営スタッフの桐葉恵さん(きりちゃん)が大好きと言うメニューでした。食材や調味料が日本では入手しにくいものもありましたが、講師のMindiと運営スタッフの島林由香さん(ゆかちゃん)が事前に話し合っ、試食をするなどして、日本で用意できるもので対応しました。(実際は準備では登場しなかった食材が出て来たり、レシピに卵を書き忘れていたり、、、てんやわんやでしたが、それも笑い飛ばせるのが異文化交流ですね、、、!)その甲斐もあって、実食の時間は食べた人全員が「おいしい！」と驚きと喜びの結果となりました。参加者の一人からはこんな感想も出ました。「ビーフン炒めは普段も作って食べてきたけど、味が全然違って美味しかった。なぜかな?と考えると、食材に下味をつける手順を入れたことだと思う。」

というように、新しい発見もあったようです。食事の後は、Mindiが用意してくれたクイズを楽しみました。タイの人口や、州の数など、タイにまつわるクイズに皆悪戦苦闘。笑いの絶えない楽しい時間となりました。「楽しく国際貢献！」シリーズも、お陰様で今回5回目を迎えることができました。



## CocoWAプロジェクト

年末にメーコックを実際に訪れたこのプロジェクト。「一緒に試行錯誤しながら創っていく、同じ船に乗った船員という意識を持つ」という想いを込め、参加メンバーを「クルー」と呼ぶことにしました。オンラインでの入念な準備期間を経て、クルーたちはチェンマイに集合しました。今回のプログラムでは、メーコックだけでなくチェンマイにあるバーンロムサイ（こちらも児童養護施設、日本人が設立、運営しています）にも立ち寄りしました。

バーンロムサイを後にして、チェンマイからチェンライへバスで3時間移動し、いよいよメーコックへ。到着直後から元気いっぱいでお迎えしてくれた子どもたちに、長距離移動の疲れも吹き飛びました。子ども達へいくつかアクティビティを準備していったのですが、その中でも人形劇を交えた歯磨きレッスンは、つたないタイ語にも

かかわらず子どもたちも集中して聞いてくれました。健康な歯でいてもらうために歯磨きの大切さを伝えたいと準備を進めてきましたが、どんなふうに伝えたらきちんと伝わるかなと、紙芝居や人形劇などなどできることを組み立てていったら、子どもたちにも楽しく伝えられました。

こちらから何か伝えるだけではなくて、子どもたちから教えてもらうこともたくさんありました。洪水で流された川岸を補修する作業では、とにかく人手はあるので体と頑張る気持ちだけで挑みましたが、効率的な作業の仕方を子どもたちがわかっていて、セメントや土嚢の作り方も教えてくれました。言葉は分からなくても、お互い身振り手振りを知っている言葉でコミュニケーションを取りながら作業を進め、へとへとになりましたが、一緒に楽しく汗を流しました。



大晦日(12/31)は、朝活、エンタメ時間、日本食づくり、クルートーク、年越しパーティーを行いました。この日の朝ごはんは、おかゆでした。これがまた絶品で、体にも優しくて、..他にもトーストやゆで卵、野菜を食べました。(タイ料理としてもおかゆは有名。タイのきゅうり、とっても美味しいです)

エンタメ時間は子どもたちとチェリーホール(イベントができるフラットなスペース)に集合し、クルーの伊藤大成(たいせい)のリードで、ジャンボリミッキーという曲のダンスから始まりました。全員で、へとへとになるくらい踊り、走り回り楽しみました。その後は、ダンスをつくる時間です。子どもたちから出てくるアイデアを使ったり、その場で創るダンスはとてもユニークでおもしろかったです。

年越しパーティーは、ゲームやダンス、プレゼント交換など、内容盛りだくさん!特に盛り上がりを見せたのが、お菓子のくす玉割りです。スイカ割りの要領でやりました。これがまた、なかなか割れなくて...笑 でも割れても割れなくても楽しいのがこの遊び。割れた時は、中に入ってるお菓子がばらまかれ、みんなで飛びつきました。

その後は、花火やバーベキュー、焚火、乾杯をして、新年を祝いました。クルーメンバーは、年越しの瞬間にジャンプをしました。日本でもよくやることかもしれませんが、タイの土地で飛びジャンプはなぜか特別で、青春を感じ、とても幸せな年越しでした。

元日(1/1)は、礼拝、振り返りワーク、SAYONARAパーティーを行いました。礼拝は、メーコックにある教会で行われます。バンドミュージックで聖歌を歌ったり、みんなでピアノに合わせて楽しく聖歌を歌ったりして、祈りを捧げる時間でした。その空間全てが手作りで、とてもあたたかい気持ちになりました。振り返りワークでは、想いの書き出しとシェアを行いました。たった数日のこのプログラムでしたが、ひとりひとり感じるものが様々で、変化があり、とても濃い日々だったことがわかりました。SAYONARAパーティーでは、お正月ということで、五円(ご縁)のお年玉と寿のお箸をプレゼントしてもらいました。それから、ゆずの「またあえる日まで」を歌い、その子を表す漢字を書いたメダルと、メッセージ付き似顔絵を贈らせてもらいました。

お返しとして、子どもたちが即興で歌を歌ってくれました。アンジェラアキの「手紙」で、とても感動しました。

最終日(1/2)は、USED品のシェア、振り返りワーク②を行いました。無理のない循環が少しでも作れたら、嬉しいなと思います。振り返りワーク②では、「Tap You」と「こっそりパディ」というアクティビティを行いました。Tap You は、触れることで仲間に愛を伝えることができる、とてもあたたかいアクティビティです。ものすごく心が動く、涙溢れる時間でした。こっそりパディは、くじ引きで引いた相手をプログラム期間中、陰ながら応援するというアクティビティです。本人でも気づかない変化や、小さな頑張りなどを誰かが見ている。そして自分も誰かを応援している。クルー同士の素敵な関係性が築けた理由の一つでもあると思います。そして、お別れ。

子どもたちとお別れは、とても寂しいけれど、なぜか「大丈夫」だと強く思えます。「わたしも、日本で頑張るね。」「また会いにくるね会いにきてよ。」たくさんの勇気と力をもらったお別れでした。



### <参加者の感想>

CocoWAプロジェクトに参加した松井みなみです。帰国してから思ったことや考えたことについて書きたいと思います。プログラム参加の期間は、フル参加9日間とショート参加6日間を選べるようになっており、私は6日間のショートプログラムに参加しました。6日間では足りなくて、もっとメーコックにいたいと思ってしまうほど、本当に楽しく過ごすことができました。その中で特に印象に残ったことは、「気持ちが繋がるのは言葉だけではない」ということです。私がタイに行くことを決めた理由は、コロナ禍で留学に行けなかったため、久しぶりに海外に行きたいと思ったから、ということと、子どもたちとの交流を通して子どもとの関わり方を学びたかったからです。

現在、私は教員になるための勉強もしているのですが、大学では座学が多かったり、身近に子どもたちと関わる機会がなかったので、このプログラムを通して何か掴めたらいいなと思っていました。特に後半部分の理由が私にとっての目的で、初めから沢山交流するぞ!と意気込んでいました。

しかし、タイ語と日本語、言語の違う私たちは中々思ったような交流ができなくて、このまま仲が深められなかったらどうしよう、とすごく不安になりました。大学の講義で「生徒と仲良くなるには雑談をすることが大切」と教えられていた私は、そもそも日常会話でさえ難しいのに、雑談をするなんて無理なのでは?と、交流に高い壁を感じ始めていました。

そんな時に、クルー同士で今感じていることを正直にシェアする時間があり、思い切って相談してみたら、

- まずは挨拶から始めてみる
- 笑顔で名前を呼ぶ
- ただ寄り添って(傍にいて)みる

など沢山の提案をもらいました。そこで私は、自分が「会話」というものに囚われすぎていたこと、そして言葉を交わさなくても気持ちを共有することができるのかもしれない、と少し希望を持ちました。翌日から、自分から積極的に挨拶をしてみたり、話さなくてもただ側に寄り添ってみたり少しずつですがチャレンジしてみました。

子どもたちと遊んだりして一緒に過ごす時間が増えていくうちに、私の中の壁は無くなっていくのを感じました。言葉は一つの手段であって、交流に必要なものは会話だけではないことを体感した瞬間でした。



## CocoWAプロジェクト参加者

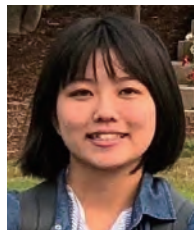
---



池田恵  
Megumi Ikeda



岡知花  
Tomoka Oka



松井みなみ  
Minami Matsui



栗林早代  
Sayo Kuribayashi



竹間未歩  
Miho Chikuma



藤木耀  
Hikari Fujiki



松村ひかり  
Hikari Matsumura



伊藤大成  
Taisei Ito



豊澤佳歩  
Kaho Toyosawa



磯崎愛永  
Kanae Isozaki

### Staff Members



島林由香  
Yuka Shimabayashi



中林知世  
Chiyo Nakabayashi



桐葉恵  
Megumi Kiriha

# MRAとは、OCAとは、活動予算

**MRAとは** MRAはMoral Re Armamentの略です。第一次大戦後の1920年代にFrank Buckman博士がオックスフォード・グループと呼ばれる平和運動を提唱したことから始まりました。

第二次大戦後、スイスのCauxで「世界会議」を開催し、「独・仏の和解」や日本を含む「アジアの融合」運動などを展開しました。このグループは冷戦の中で武力の再武装を進めるのではなく、Moralの再武装を行うことを提唱してきたのです。これがMRAの活動の起点です。

その後米国ではミュージカルショーを公演しながら世界を旅行して、青年の教育を行う「Up with People」という教育財団に展開し、日本では「(財)MRAハウス」として国際相互理解の増進を図る事業、国際的リーダー・人材の育成を図る事業へと発展しました。

**OCAとは** OCAはOff Campus Activitiesの略です。1971年(財)MRAハウス内にアジアとの国際交流、学生交流事業を目的として発足しました。この年日本の学生が東南アジアの大学を訪問し、その後50年以上東南アジア、韓国、台湾を中心に若者の国際交流活動を続けています。

**OCAの活動予算** OCAの2022年度(実績)と2023年度(予算)の活動内容と年間経費/予算は以下の通りです。

プログラム	2022年度(実績)	2023年度(予算)
<b>アジアンビートプロジェクト</b>	1,297,000	1,279,000
<b>日タイ学生交流</b>		
タイ学生訪日サマーキャンプ	716,000	891,000
北部タイプロジェクト	1,310,000	1,060,000
日タイ学生オンライン		30,000
<b>メーコック、バーンロムサイ</b>		
メーコックへの寄付	500,000	500,000
バーンロムサイへの寄付	400,000	400,000
CocoWAプロジェクト	671,000	935,000
メーコック日本研修	0	750,000
慶応タイプロジェクト	989,000	0
<b>その他のプログラム</b>		
HP改修	93,000	350,000
OCAレポート	196,000	400,000
クリスマスパーティ	62,000	100,000
海外出張経費	プロジェクトに含む	1,915,000
業務委託経費	699,000	1,300,000
一般経費	878,000	2,000,000
合計(円)	7,811,000円	11,910,000円

**参加方法** OCAの活動はメンバー制を取っていません。入会金も必要ありません。以下ホームページに活動予定と内容を記載しますので、参加ご希望の方はホームページに記載された申し込み方法にてご連絡ください。

## 連絡先

### 一般財団法人 MRAハウス OCA国際交流事業

〒106-0047 東京都港区南麻布4丁目9番17号レフィール南麻布1F

電話 03-3445-5111 Fax 03-3445-5112

ホームページ アジアンビート関係 <https://asianbeat.net/>

日タイ学生交流関係 <https://thaijapan.mrafoundation.or.jp>